

私の戦争体験記

シニアライフアドバイザー 宮澤 溥



開戦の当時

太平洋戦争が始まったのは、忘れもしない私が5歳半の時でした。当時私の家は豊島区長崎一丁目にあり、昭和16年12月8日午前7時のニュースで「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部12月8日0時発表、帝国陸海軍は今8日未明西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態には入り」という言葉が飛び込んできて、父が大きな声で「戦争が始まった！」と叫んで、私は何となく不安に駆られたことを今でもはっきりと覚えています。その時、母は台所で朝食の支度をしている最中で「ついに戦争になってしまったの？」とたいへん驚いた様子でした。姉たち3人はそれぞれ学校に行く準備をしている驚いた様子などはよく分かりませんでした。

戦争が始まった直後は、私はまだ小さな子どもであったせいも、食べる物や着る物などにもそれほど不自由を感じることもなく、また戦争の恐ろしさも分からずに世の中の時代の風潮に乗って、近所の同じ年頃の子もたちと毎日兵隊ごっこや戦争ごっこなどをしながら遊んでいました。そのうちに食べるものも配給制になり、次第に物不足になっていきました。

兄の出征と国民学校への入学

昭和18年の2～3月頃、日の丸の旗をたたんで襷掛けした長兄が、神社でまず戦争祈願をして、その後町会の人や家族・知人・友人など多くの人の歓呼の声に送られて戦場へと出征して行きました。もちろん、私も周りの人と同じように日の丸の旗を頻りに振りながら、「必ず生きて元気な姿で帰ってきてほしい」と兄と神様をお願いしたことを小さいながらはっきりと記憶しております。

後に残された祖母をはじめとする家族の何とも言いようのない寂しそうな様子が今でも目に焼き付いていますが、結局、戦後になっても兄は帰ってきませんでした。

国民学校入学

兄が出征した年の4月、私は長崎第四国民学校の1年生になりました。黒い革製の新品のランドセルを背負って元気よく勇んで校門に入っていました。校庭の正面には天皇・皇后両陛下のご真影を奉った「奉安殿」と、脇の方には薪を背負って本を読む「二宮金次郎像」があり、その後、朝礼や登下校するときには時々拝礼をするようになりました。



空襲の到来と学童集団疎開

昭和19年に入り、食料をはじめとした物不足は一段と深刻さを増していき、「儉約」「拳国一致」「欲しがりません、勝つまでは」などという標語が使われるようになりました。

戦況は大本営の発表と反対に厳しさを増してしきりに防空演習が行われ、やがて空襲の到来が現実となりました。

私は昭和20年2月に福島県の「原の町」に学童集団疎開することになりました。ある日の夜の7時ごろ、山手線で池袋から上野まで行き、常磐線で「原の町」まで夜行列車に乗って翌日朝、5時ごろに到着しました。途中、水戸近くで軍事機密地域を通過するときには、同乗した軍人から窓の鎧戸を閉めて外を見ないように言われました。

疎開先の生活と終戦

間もなく「原の町」は敵の艦砲射撃と艦戦機の襲撃を受けるところとなり、当時の平経由で山の中の「土湯」に移動して暮らし、終戦の年の10月に帰ってきました。

疎開先でいじめられたこと、玉音放送を聞いたこと、池袋が焼け野原になり富士山が見えたこと、栄養失調で母に背負われて帰ってきたこと、自分の家が焼けてなくなっていたことなど、今ではすべてが懐かしい思い出です。